2020 年度後期　授業改善アンケート集計結果に対する意見
―社会イノベーション学部

学部長　遠藤健哉

《科目開設部門》が社会イノベーション学部である授業科目について、2020 年度後期に実施された授業改善アンケートの結果全体に対してコメントを述べたい。

2020 年度後期授業は、COVID-19 の感染拡大への対応のため「原則、遠隔授業とするが、各学部・研究科等が面接（対面）方式の必要性を認めた授業に関しては、面接（対面）授業による実施を可とする [1]」という方針のもとで進められた。その結果として、実際の授業は、遠隔授業（リアルタイム型、オンデマンド型）、対面授業に加え、遠隔授業と面接（対面）授業とを組み合わせたハイフレックス授業など、多様な授業方式で実施されることになった。こうした授業実施方式の変更を踏まえ、本アンケートは質問項目等への修正を加えた 2020 年度前期調査の内容をほぼ踏襲し、学生によるアンケートの回答についても web での入力という方法を継続した。これらのことから、現時点において、前年度調査結果との単純な比較が容易ではないことについて、予め言及しておきたい。

当該授業改善アンケートの集計結果をみると、2020 年度後期授業は、概ね高い評価を得ており、全体として授業は適切に実施されていたと考えられる。その理由として主に3つの点を指摘することができよう。

第一に、13個の質問項目（これらの中には履修者の授業への参画や事前・事後学習の状況に関するものも含まれる）のうち11個もの項目について、5点尺度において全体の平均値が4点以上（「とてもそう思う」、「そう思う」の合計）となっていることである。4点以上となった項目数は、2020 年度前期調査結果の6項目から大きく増加している。

第二に、質問項目1「円滑に授業を受けることができた」への得点が平均値で 4.36 と高かった点を取り上げることができる。今年度後期は、学生諸君にとっても、多様な方式で実施された授業への柔軟な対応が求められたと思われる。この回答結果は、学生諸君の受講に大きな混乱がなかったことをうかがわせるものである。

授業全般に対する評価を問う項目としての 11「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」が 平均値で 4.22 点と高い値を示していることが第三の理由である。本項目は、今年度前期アンケート結果の 3.97 点（平均値）から上昇しており、遠隔授業と面接（対面）授業の両立に腐心してきた我々教員ひとり一人にとって安堵できる結果であるともいえよう。

次に、授業に対する学生および教職員の取り組みに関する質問項目に着目してみたい。2020 年度前期に新たに加えられた項目の集計結果をみると、項目2「この授業の内容を理解するために努力した」は平均値で 4.33 点、項目3「教員は毎回の授業ごとに十分な指示を行っていた」は

[1] 「2020 年度後期授業実施方針の変更について」（2020 年 8 月 4 日）

平均値で4.30点となっており、いずれも 2020 年度前期の同項目の平均値より上昇している。当該結果は、学生・教員ともに必ずしも十分とはいえない授業環境の中で前向きに取り組んだ努力を反映したものと解釈できる。

一方で、項目8「教員との双方向のやりとり（質問への回答や課題の返却等）が十分にあった」は、平均値で 3.97点と相対的に低い数値を示していた。遠隔授業やハイフレックス授業では、対面（面接）授業に比べて受講者とのコミュニケーションが容易ではなく、授業内での双方向のやり取りに苦労があったことがうかがえる。それに加え、項目13「1回の授業にあたり、授業時間と事前・事後学習のために費やした時間を合わせた平均の時間」に対する回答は、「2時間未満」が65.2%であった。講義時間（90 分）を勘案すると授業時間外の学習時間は 30 分未満であり、事前・事後の学習をさらに促していくことが必要であろう。

さらに、集計結果には、履修者各人の観点からの授業全体に対する総合的評価であるともみなすことができる項目11「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」について、他の科目との相関係数（*r*）も示されている。その内容を見ると、この授業全体に対する総合的評価は、授業科目により学生自身にとって興味や関心が得られたことと強く相関[2]していることはもとより、学生がより良く受容できるように授業を適切に実施することとも比較的強く相関[3]していることが示されている。引き続き、授業の適切な実施に向けて努力を維持していくことが望まれる。

また、本アンケートでは、「授業で用いられた授業手法」と「授業を通じて身についた資質・能力」についての質問も設けられている。「授業で用いられた授業手法」については、「課題（レポート等）」が82.1%とかなり高い。これは本年、COVID-19 対応で期末試験行った授業が極めて少なかったことが影響している。それ以外にも「学生によるコメントペーパー（29.4%）」、「質疑応答（23.8%）」、「グループワーク（21.2%）」など多様な授業手法が組み合わせて採用されている状況が示唆されている。「授業を通じて身についた資質・能力」については、その分野の知識・学力のみならず、論理的思考力、言語運用能力（主に英語）、柔軟な発想力など多様な資質・能力の涵養につながっていることがうかがわれる。

《科目開設部門》が社会イノベーション学部である授業科目を大学全体の授業科目と比較した場合、「授業で用いられた授業手法」や「授業を通じて身についた資質・能力」として回答された全体的傾向は類似しているが、大学全体よりは若干回答割合が高い項目が少なからずある。このことから、《科目開設部門》が社会イノベーション学部である授業科目の特徴として位置づけるに際し、さらに精査していく必要があるものと考えられる。

最後に、本学生授業改善アンケートは、実施必須科目の 94.7%、実施任意科目の 66.0%で実施された。また、延回答者数に対する各項目における有効回答数は約 98%であり、授業に参

---

[2] 項目 11「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義であった」と項目 10「この分野への興味・関心が引き起こされた」との相関（r=0.77）。

[3] 項目 11「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義であった」と、項目 4「教員の指示は明確でわかりやすかった」との相関（r=0.70）、項目 3「教員は毎回の授業ごちに十分な指示を行っていた」との相関（r=0.69）、項目 12「教員の授業資料は見やすかった」との相関（r=0.67）。

加していた学生全体の評価を十分に反映した結果であるものと判断できる。ただし、延履修者数に対する延回答者数は、25.3％にとどまった。本アンケートの回答が講義配布方式から web 入力方式に変更されたことが少なからず影響したとみられる。2021年度は告知方法を工夫するなど、学生の回答率の向上に努めることが肝要となろう。